

水産と観光の融合「ちょいのぞき気仙沼」の挑戦

～東日本大震災後に見られる「内発性」の萌芽～

研究員 大友 和佳子

目次

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 1. はじめに | 4. 水産と観光の融合「ちょいのぞき気仙沼」の誕生 |
| 2. 気仙沼市の概要 | 5. おわりに～東日本大震災後に見られる「内発性」の萌芽 |
| 3. 震災後に生まれた「内発性」
—意識の転換 | |

1. はじめに

本稿は、東日本大震災後の気仙沼市に誕生した水産と観光の融合事業である「ちょいのぞき気仙沼」について報告をし、そこで観察される「内発性」の萌芽について触れようとするものである。「内発性」という言葉の定義は概念が曖昧なところがあるが、本稿では、赤坂・鶴見（2015年）[1]の「その土地に暮らす人々が内発的な欲求をもって、熊楠の言葉で言えば自治の精神をもって、何かに立ち向かうこと」という説明を引用したい。

2011年に発生した東日本大震災から、2017年7月時点で、6年と4か月の歳月が流れた。報道は減りつつあるが、被災3県の避難者数は2016年1月時点で約18万人、仮の住宅で暮らす人の数は9万人¹と、復興は未だ道半ばである。被災地では、先の見えない深刻な生活課題を抱えている人も未だ多い。

しかし、被災後の地域の変化を見た場合、家族や仕事、家、街を失うといったネガティブな側面のみがあるわけではない。例えば、地域から流出していた若い人材が地域に戻

る、地域から新しい動きが生まれる等のポジティブな変化もある。

そこで本稿では、敢えて震災後に地域に生じたポジティブな変化に目を向け、その一つの事例として、気仙沼市に誕生した「ちょいのぞき気仙沼」について報告をしたい。

被災地域の状況は地域によって異なるが、本レポートでは震災復興を牽引している東北最大の都市である仙台市から車で3時間ほどの距離にある気仙沼市を取り上げることとした。それは気仙沼市が都市部から遠く、仙台市の発展に依存することが難しく市民の内発的な動きが必要とされることに注目してのことである。

2. 気仙沼市の概要

気仙沼市は、宮城県の沿岸北東部に位置し、水産業を基幹産業とする地域である。「陸中海岸国立公園」の南玄関口に位置し、美しいリアス式海岸を有している（図1）。気仙沼市では震災前から地域を内発的に盛り上げるための意識が高く、リアスの海・山・川・里の

1 東日本大震災の2017年時点での被害状況については、復興庁（2017年）「被災者等の状況」より。
(<http://reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-6/index.html>)（2017年7月6日 最終アクセス）

豊かな自然環境で生まれた新鮮な食材と、そこから生まれる固有の食文化を活かし、1986年には「魚食健康都市宣言」、2003年には全国初となる「気仙沼スローフード」都市宣言を行っている。

図1 気仙沼市の立地



2011年の東日本大震災では甚大な被害を受け、死者・行方不明者が2,266人、全壊・半壊住家が1万4,375軒に及んだ他、津波浸水域に所在する事業所数、従業員数が圏域全体のそれぞれ84.0%、86.1%に達し被害が壊滅的だったことが伺える。

気仙沼市と南三陸町を含む気仙沼圏の復興の進捗状況を表1に示した。人口については、震災に伴う人的被害や域外への避難・転居などから発災年に6,000人減を経験している。その後も、自然減と社会減に歯止めがかからず、2015年には7万8,854人と震災前の86.7%の水準まで減少している。他方、漁業については漁港の機能復旧を優先的に進めたことから、水産物水揚げ量(2015年1～9月)は、5万6,000トンと震災前の9割程度まで回復している。観光客入込数については、2014年は200万人と震災前の5割強と低迷している。被災事業者の営業再開率も66.9%(2015年3月末)と、県全体の85.8%を大きく下回っている。また、残りの28.4%が廃業、4.7%が未

表1 気仙沼圏の復旧・復興の進捗状況

		2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	
人口	(人)	90,918	84,398	82,718	81,447	80,078	78,854	
		100	92.8	91	89.6	88.1	86.7	
世帯数	(世帯)	32,025	30,513	30,200	30,492	30,563	30,606	
		100	95.3	94.3	95.2	95.4	95.6	
災害公営住宅整備戸数	着工	(戸)	2,868	0	0	84	459	1,759
			100	0	0	2.9	16.0	61.3(74.7)
	完了	(戸)	2,868	0	0	0	84	494
		100	0	0	0	2.9	17.2(46.7)	
被災事業者営業再開率		%	-	79.0	72.2	66.2	66.8	66.9
水産物水揚げ量	千トン		110.0	30.0	63.0	70.0	87.0	56.0
			100.0	27.2	57.2	64.0	79.2	90.2
製造品出荷額等	(億円)		1220.0	559.0	533.0	757.0	757.0	-
			100.0	45.8	43.7	64.0	79.2	-
食料品	(億円)		986.0	392.0	314.0	454.0	757.0	-
			100.0	39.7	31.8	46.0	83.3	-
観光客入込数	(万人)		362.0	79.0	168.0	190.0	220.0	-
			100.0	21.8	46.4	52.4	55.3	-
宿泊客数	(万人)		44.0	22.0	30.0	33.0	34.0	-
			100.0	48.9	67.7	75.6	77.2 (107.1)	-

出所：大川口(2016年)[2]²

2 2015年のデータは、1月～9月のものである。

定となっており、3割弱の事業者が廃業している。

こうした状況からは、依然厳しい当該地域の状況が察せられるが震災後に関東圏などの地域外に流出していた若い世代が、気仙沼に戻ってくるという明るい話題もある。こうした若い世代が地域に目を向け、共に地域を盛り上げようとする機運に大きな期待が集まっているところである³。

3. 震災後に生まれた「内発性」－意識の転換

それでは、次に震災後に生まれた「内発性」について、具体的なインタビューを通して報告する。まずは気仙沼市商工会議所の会頭を務める菅原昭彦氏へのインタビューを抜粋したい。

「東日本大震災後に生まれた一番の変化は地域の人々が地域の価値に目を向けたことでした。地域の人々の意識が大きく変わりました。震災前は気仙沼なんて何もない地域だ、と言っていた人々が、震災を経験した後、皆口を揃えて、この地域はすごいんだ。食文化にかけては他の地域に負けないものが山ほどある。この地域を何とかしたい、と言い始めました。地域を復興させるために自らが立ち上がる必要がある、と皆が思ったのでしょうね。」菅原氏は次のように話を続けた。

「このことは地域が変わるチャンスだと思いました。皆の意識が変わった今だからこそできること

がある。皆で力を合わせて地域を再生していくこと、そのために何をすればいいのか、と考えました。」⁴

こうした地域の人々の切実な思いは様々な変化を生み出した。その一つに水産と観光を融合させた「ちょいのぞき気仙沼」という新規事業がある。「ちょいのぞき気仙沼」とは、地域外の人向けの観光事業であり海洋都市である気仙沼地域特有の漁具屋や、氷屋、造船場、水産加工場、魚市場などを体験することのできる観光コンテンツ事業（図2・図3）である。

気仙沼地域の地域経済は、水産関連業が7～8割を占めており、地域再生の中核に漁業を据えている。観光業従事者は、震災前から地域の中核産業である漁業と連携することを望んでいたが、連携するきっかけがなかった状況であった。2つの異なる産業の間には、慣習や文化などの側面から連携するには難し

図2 ちょいのぞき気仙沼マップ [3]



出所：一般社団法人 リアス観光創造プラットフォーム

3 気仙沼市では、2016年に移住・定住者支援センター (<http://imakawa.net/blog/3610.html>) が出来、I・Uターンで生活を始めた若い人材を中心に活動している。2011年から2017年までの転入者人数は、9,946人であるが、転出も14,574人と多く、死亡6,990人、出生2,274人も含めると、人口減は、9,344人となっている（統計／宮城県推計人口調べ 2017年）（2017年7月6日 最終アクセス）

4 2017年5月22日に実施した気仙沼市商工会議所 会頭菅原昭彦氏へのインタビューより

い状況があった。しかしそうした2つの異なる産業間の連携が、震災を契機に可能となったことは画期的なことである。

「ちよいのぞき気仙沼」に事業者の立場から関わっている廣野一誠氏はその変化について次のように語っている。「そうですね、震災の前は地域に『出る杭は打たれる』ような雰囲気がありました。何か目立ったことはしにくい状況です。けれど、震災の後そんなことを言ってもいられない状況が起きて、新しいことにチャレンジしやすい環境になりました。それほど地域が切実な課題を抱えているということですね。外から来ているボランティアの人があんなに頑張ってくれているのだから、自分達も頑張ろうと皆が奮起したと思います。」

大震災という危機的な状況は、地域に様々な内発的な動きを生み出していった。ここで言う「内発的」という言葉の意味としては、「地域の内側から立ち上がってくる動き」のことを指したいと思う。次に、その内発的な変化の一つである「ちよいのぞき気仙沼」という事業についてもう少し詳しく見てみよう。

4. 水産と観光の融合「ちよいのぞき気仙沼」の誕生

4. 1 「ちよいのぞき気仙沼」誕生の背景と経緯

「ちよいのぞき気仙沼」が誕生したのは2015年である。企画を提案したのは、震災復興のために地域に駐在していた経済同友会の森成

図3 ちよいのぞき 気仙沼 多様な体験メニュー

漁具屋潜入

・アサヤ <http://www.asaya.co.jp/>

漁に使う漁具の解説、倉庫・工場見学、ロープワーク体験など

漁の種類だけ「漁具(ぎょう)」がある! 養殖から遠洋漁業までそろった気仙沼には、魚を獲るための知恵と工夫にあふれた道具がいっぱい。タコを捕まえるカゴや大きな魚に電気ショックを与えて釣り上げやすくする機械など、見て、触れて、実際に使ってみて、獲ってみて…漁具の世界をご堪能下さい!



氷屋探検

・岡本製氷冷凍工場

巨大氷作りの見学、氷切り体験、かき氷の試食など

魚の鮮度維持には欠かせない「氷」。その製造工場に潜入します! 135キロの巨大氷が製造される過程を見学し、その氷がずりりと並ぶ貯氷庫へ、-10℃の青白い氷の世界は圧巻です。出来た氷をのこぎりで切断する氷切り体験や、その氷で作るかき氷の試食など、体験しながら学べます。



造船所探検

・木戸造船 <http://www.kidourashipyard.com/>

造船所の内部見学、作業体験、船内見学など

平らな鉄板が、数百トンの大きな造船へと変換していく造船現場に潜入! 実際に建造が進む船を見ながら、船造りの過程を見学したり、作業の「お手伝い」をしたりできます。運が良ければ、造船現場の見学もできるかも…?! 気仙沼の漁業を支えるものづくりの現場にお邪魔します。



水産加工場探検

・足利本店 <http://sozaiya.com/>

メカジキやサメ・カツオの加工場見学、解体ショーなど

気仙沼が水揚げ日本一を誇る「メカジキ」、「カツオ」、「サメ」その加工工場に潜入します! 10℃の冷蔵庫に潜入し、メカジキ、サメ等に触れたり、カツオの季節には箱詰め作業の現場やカツオの解体ショーを見学します。最後は、気仙沼ならではの珍しい食材をちよい食べます。



わくわくツリーハウスピクニック

・東北ツリーハウス観光協会 <http://www.tohokutreehouse.com/>

ツリーハウスでのカフェ、ものづくり体験など

樹の上の秘密基地ツリーハウスにおいて、気仙沼の新しい遊び場で、大人も子供も一緒に宝探しや工作をし、軽食・ドリンクやお菓子を販売する特設カフェに、粗料のゲーム、資料のフォトフレームやバードハウスの工作キットも準備しています。さあ、夢を語りあえる場所においでください。



漁師ぐらし体験。

・まるオフィス <http://maru-office.com/>

刺し網漁などの漁師体験、漁師めしの調理・試食など

メカブ釣りや穴子漁、季節の魚がかかる刺し網漁など…漁師の海を舞台に、その時々々に合わせた漁の体験や、漁師めしづくりなどのプログラムを提供します。停泊した船で水揚げ体験をしたり、船に乗って沖に出たり…もちろん、漁師さん直伝の「漁師めし」づくり体験もあります。



解体ショー＆ランチ

・復興 屋台村など

旬のお魚の解体、BBQや刺身で食事

子供にも大人にも大人気の食材「マグロ」、突っただ角がトレードマークの「メカジキ」など、旬のお魚を漁師さんが解体、解体したての魚を、海鮮丼やバーベキューで味わいます。大型の魚が解体される様子は迫力満点! お子様の食育にもGOODです。気仙沼の水産果を、目で舌でご堪能ください。



すし握り体験

・唐島御殿 づなかん <http://moriyasuisan.com/>

獲れたてのネタを使ったすし握り体験、試食など

元・寿司職人で、現在は民謡の料理人を務める職人さんが、すし握りの技を伝授します! ネタは目の前の海で獲れたカキやホタテ、地魚などの新鮮な魚介類。遠洋漁業での気取を物語る「唐島御殿」を舞台に、すし握りをしながら、漁師さんの暮らしぶりものぞいてみてください。



函屋探検

・藤田製函店

魚箱を扱う「函屋」潜入、職人技の「函持ち」体験など

魚を出荷するのに欠かせない発泡スチロールの「魚箱(ぎょばこ)」。この出荷を手掛ける「函屋」さんを見学します。8メートルも積み上がった箱の山を登々と運ぶ職人技は必見です。高度なバランス感覚を必要とする函持ち体験など、1日函屋体験をしてみてください。



魚市場 復興物語

・気仙沼観光コンベンション協会 <http://www.kesennuma-kanko.jp/>

魚市場の見学、震災からの復興過程の解説など

気仙沼魚市場は、東日本大震災で大きな被害を受けながら、わずか3か月で復旧を遂げました。復興の道に実現した背景には、関係者のたゆまない努力がありました。現在の魚市場を見学しながら、藤田さんがそのドラマをご紹介。市場がお休みの日には、「函屋」もその役割がもたらします。



人氏。その前身は、2006年から活動している街づくりサークル「気楽会」の活動である。「気楽会」とは、地域で菓子屋を営んでいる小山裕隆氏が立ち上げたサークルで、地域の人々が地域の取り組みを楽しみながら学ぶことで、地域を元気にしていこうという趣旨の様々な取り組みを行っていたものである。い

わば「そこにあるものの価値に気づき、楽しむ」ことをコンセプトとした取り組みである。

そうした取り組みに注目した森氏が、対象の枠を広げ、漁業と観光が手を結ぶことで地域を盛り上げようと提案したところ、面白そうだと、何か新しいことが始まるかもしれないと地域の人々が集まったところから端を発している。

この取り組みは、地域の中核的な産業でもあり、アイデンティティでもある漁業や漁港のある暮らしを、観光と結びつけ地域の人々が水産都市の暮らしに誇りを取り戻すことも意図している。

4. 2 「ちょいのぞき気仙沼」の現状と課題

このように地域においては画期的な取り組みとして注目されている「ちょいのぞき気仙沼」の事業であるが、今後改善すべき点もある。「ちょいのぞき気仙沼」の現状と課題、改善点などについて述べたい。

「ちょいのぞき気仙沼」へのこれまでの参加者は、延べ2,000人を超え、体験客をホストする事業者は初年度の12社から2年目は25社と倍増している。事業を成功させるために、気仙沼市では地域ガイド（地域コーディネーター）の育成を考えており、地域の魅力や地域に対する愛着を、自分の言葉で話すことのできる人材の育成を進めている。地域ガイド制度については、まだしくみ化していないが、今後有料の制度として確立させていく考えである。地域の人々が地域の魅力や暮らしを外部の人に語ろうとすることは、地域の人々が地域を知ることにもつながる。こうしたガイドのしくみを作ることで、地域の人々も自分では気が付いていなかった地域の魅力に気が付き、外部の人に伝わる価値となる。地域内外の人々が「共に」地域の価値を知るしくみと言える。

こうして、地域の価値を地域内外の人々の交流を通して発見し共有することを目的に、誕生した「ちょいのぞき気仙沼」ではあるが、現段階での課題もある。それは、収益性とプロモーション、企画そのものの精鋭である。現段階ではこの企画に参加している事業者が十分な収入を得ることのできるほどのコンテンツ産業とはなっていない。「観光を目的に訪れる外の人にとっては、地域の文化に触れることが楽しいものである必要があります。今後、そうした顧客視点を十分に追求していく必要があります。」と、商工会議所会頭の菅原昭彦氏は語っている。今後は、企画を顧客視点で十分に精鋭させる中で、収益的な継続性を図る必要がある。

5. おわりに－東日本大震災後に見られる「内発性」の萌芽

最後に、以上の報告から震災後の気仙沼地域に見られた「内発性」が地域の再生に果たす意味を問いたい。東日本大震災が発生したことで、被災地には大量のボランティアスタッフ、公的な支援者等が入り、様々な復興事業が行われ続けている。甚大な被害にあった被災地には、「地域を放っておくことはできない」と、流出していた若い世代が地域にUターンするといったことも生じている。今までは地域と深いつながりのなかった若い世代も、避難所に住み互いに助け合いながら日々を送る中で、地域の人々との絆を深め地域を何とか再生する必要があると地域の価値を見直す動きが起きた。本レポートで提示した「ちょいのぞき気仙沼」の誕生も、そうした強い地域の内発的な動きを背景として生まれている。こうした、被災後の地域の様々な変化は周囲からも期待を集めている。

2014年以降「地方創生」という言葉が声高に叫ばれている日本社会である。だが、真に

地域を再生するには、やはり地域の人々が主体的に「この地域を何とかしたい。この地域を元気にしたい。」と強く願い、継続した行動をすることが最も重要な出発点となる。しかし、足元の価値は見えにくく、気づかない内に廃れていくもの、誰かが何とかしてくれると放置された状態で消えていくものも多い。

その点から考察すると、東日本大震災は各地域が抱える人口減少や産業構造の課題等の緩やかに進展していく構造的な地域課題を急速に浮彫にし、人々を深刻な課題へと直面させた。そのことは、地域課題に立ち向かう人々の内発的な力を誘因したと考えられる。

こうした被災地で見られる強い内発的な動きについては、海外や県外から「東北の人々の意識と行動の変容から今後の生き方や経営の仕方を学びたい」と多数の人々が集まっている現実からも垣間見ることができる⁵。

環境、経済、人口、財政、文化、暮らし等様々な側面から複合的な課題を抱える日本社会である。そうした中、自らの足下の価値に目を向け、主体的に課題に立ち向かおうとする地域の「内発的な力」には、将来の日本社会を切り開く大きな可能性があることを提唱したい。

以上

〔謝辞〕

本調査の実施にあたり、多数の機関や担当者のご協力を得た。特に以下の機関及び担当者には各種の便宜供与及び情報提供を頂いた。ここに記して厚く御礼申し上げる次第である。

気仙沼商工会議所 会頭 菅原昭彦氏
 気仙沼市 産業部 観光課 課長補佐 畠山勉氏
 株齊吉商店 専務取締役 齊藤和枝氏
 小野寺里奈氏

気仙沼観光コンベンション協会

事務局次長 熊谷俊輔氏

株アサヤ 専務取締役 廣野一誠氏

一般社団法人 気仙沼地域戦略 小柳朋子氏

〔引用文献〕

- [1] 『地域からつくる 内発的發展論と東北学』(2015年)、赤坂憲雄 鶴見和子、藤原書店
- [2] 「宮城県・気仙沼圏の復興の現状と今後の再生の方向性－人口減少時代における産業・雇用の再生の在り方」(2016年)、大川口信一、Business Labor Trend 2016. 3
- [3] 「ちょいのぞき気仙沼」(2015年)、一般社団法人 リアス観光創造プラットフォーム
- [4] 『ハーバードはなぜ日本の東北で学ぶのか』(2016年)、山崎蘭加、ダイヤモンド社

〔参考文献〕

- [1] 「海と生きる－宮城県気仙沼市の選択」(2016年9月) 月刊 経団連
- [2] 気仙沼メカジキ本 気仙沼メカジキブランド化推進委員会
- [3] 「海と生き、持続する街に」菅原茂(2014年4月) 月刊 事業構想
- [4] 「観光で地域をかえる－気仙沼にコンテンツ革命を起こす男たち」(2017年) 交流文化通信 <https://www.jtbcorp.jp/jp/colors/detail/0078/> (2017年7月6日最終アクセス)
- [5] 『内発的發展論の展開』(1996年) 鶴見和子、筑摩書房
- [6] 『おかみのさんま』(2012年) 齊藤和枝、日経BP社
- [7] 『災害ユートピア』(2011年) レベッカ・ソルニット、亜紀書房
- [8] 『地域力の再発見』(2015年) 岩佐礼子、藤原書店

5 ビジネススクールで世界トップと言われるハーバードビジネススクールも2011年から毎年被災地を訪れ、東北から新しいビジネスの在り方、生き方を学んでいる [4]。